

Title	日本における葬送儀礼と仏壇の意義
Author(s)	Bokhoven, Jeroen
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44122">https://hdl.handle.net/11094/44122</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ボクホベン BOKHOVEN, ヨロエン JEROEN
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17454 号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	日本における葬送儀礼と仏壇の意義
論文審査委員	(主査) 教授 中村 生雄  (副査) 教授 川村 邦光 助教授 荻野 美穂

### 論文内容の要旨

本研究は、日本の葬送習俗と仏壇祭祀のうちに見られる靈魂観念・他界観念の特質を、各地でのフィールド調査にもとづく資料を活用しながら解明しようとしたものである。当該領域の日本の民俗学研究が、ムラ共同体における葬送儀礼の担い手の問題、あるいは墓制についての地域間比較などをその考察の中心に置いていたのに比して、本研究は家族の内部で死者の霊がどのように表象され処遇されていくのかを、主に祭壇、盆棚、仏壇など家庭内に設置されるもろもろの装置に関心を払いつつ、葬送儀礼および葬後の儀礼の時間的な経過に沿って具体的に分析している。論文の本論部分は、第一部と第二部に分かれる合計9章と序章・結論からなっていて、分量的には400字詰め原稿用紙に換算して670枚ほどであり、そのほかに40点ほどの写真が資料として付されている。

第一部「先祖祭祀における葬儀の意味と死霊の扱い方」の第1章では、日本における葬墓制と死霊祭祀の歴史の概観として、近世寺請制度の生成と庶民層における位牌・仏壇の普及、明治以降の火葬の急速な浸透の事情が紹介される。そのあと、奈良市郊外阪原町における土葬と両墓制を基本とする葬送習俗が考察の対象となる。第2章では、「死者の出了日」から葬後の諸行事までを時系列的に配列して、それぞれの場面での家族や共同体、僧侶の行動を記述し、第3章ではそれらの現地調査の内容分析と意味づけが行なわれる。その主要な論点は、土葬で行なわれる葬送儀礼のなかでの死穢忌避の観念、および儀礼の時間的経過のうちから読みとれる霊肉分離観念についてである。また、葬儀時に設置される祭壇と、両墓制にもとづく2か所の墓との関係の分析を通じて、家と共同体の相互関係について仮説的な見解をしめす。

次に奈良市内のある葬儀にかんする参与観察の報告と分析考察がつづき、第4章では「死者の出了日」以降の関係者の行動の詳細が、夫婦・親子間の心情にも留意して時系列的に紹介され、第5章で、やはり死穢忌避の観念や霊肉分離観念の存在、とりわけ火葬時の骨上げやそのあとの納骨の意味が検討される。また、土葬の場合とは異なる墓と祭壇の意味と相互関係が考察される。以上により、これまでの一般的な理解とは異なって現在死穢忌避の観念はむしろ強くなっていること、また儀礼のなかで霊肉分離を志向する要素は決して大きくなく、逆に霊肉の分離を避けるための行動が見られることを強調する。

次の第二部「仏壇の起源及びその死霊祭祀における役割」では、仏壇の起源をめぐる従来の研究を批判的に整理したうえで、やはり実地調査のデータを踏まえて仏壇と死霊祭祀のかかわりを中心に考察がすすめられる。まず第6章では、これまでの仏壇研究が仏壇の起源を問うことだけに限定されてきた点を指摘し、それを葬送儀礼全体のなか

位置づけ、そこから靈魂觀念や他界觀念をさぐる視点が必要であることを主張する。第7章では、仏壇の起源論として代表的な竹田聰洲の持仏堂起源説と柳田国男の盆棚起源説が比較検討され、それぞれの限界と問題点が指摘される。その過程では、島根県斐川町を中心とする各地での調査事例が検討材料として有効に活用されている。

第8章は、前章での考察をもとに日本における仏壇の発生と庶民層への普及のプロセスを歴史的に跡づける。具体的には、仏壇の発生にさいしてはそれと並んで位牌の出現や聖という民間宗教者の役割が重大であったこと、また真宗教団の布教・展開過程における道場の役割の重要性、さらには仏壇を製造し商品化する仏壇業者の発生の経過が考察対象となる。最後の第9章では、島根県斐川町での各家庭における仏壇祭祀の現状とそれにかかわる意識調査をもとにして、仏壇を祀ることによって人びとが死者や先祖にたいしてどのような觀念を形成し、それが日常生活においてどのような機能を有しているかを論ずる。またその結果として、現代の日本人にとっても仏壇は遺族が死者や他界と交流することによって悲しみを克服するための重要な装置であることを論証する。

### 論文審査の結果の要旨

本研究は、従来の日本民俗学が主題的にとりあげることの少なかった仏壇に焦点をあてて、日本における死者祭祀の形成とその宗教的な意義、あるいはそれを介して読み取ることのできる靈魂観・他界観の特徴を具体的な調査事例をとおして明らかにしている。とりわけ仏壇の起源にかんする従来の一面的な見解を批判するとともに、生者が死者にたいして「愛着」と「恐怖」という相反する心情に着目することによって、葬送儀礼、葬後の儀礼、および祭壇、墓、仏壇などに見られる両義的な性格を考察している。

また、柳田国男の主張する「霊肉分離」説とは異なって、葬送儀礼のなかでは死者の靈魂と身体をつなぐの確保が重視されていることを具体的事例にもとづいて明らかにし、さらに死穢忌避の觀念についても、通説とはちがって現代の日本人が以前よりもかえって強く死の穢れを忌避し、死から生者を隔離し、死の穢れを隠すことに力が注がれていることを指摘する。そのほか、祭壇、仏壇、位牌、墓などの機能を葬送儀礼全体のなかに位置づけ、そこから靈魂観・他界観を整合的に読みとろうとしている点、また、葬送儀礼を家屋内のミクロコスモスと家屋外の村落共同体としてのマクロコスモスが交差する儀礼と見なし、その複合的な意味を重要視している点なども、本研究のすぐれた着眼である。

しかし一方、本研究では、実地調査からの資料を利用するにあたっての方法的な吟味が必ずしもじゅうぶん行なわれていないこと、葬送儀礼における寺や僧侶の役割が主題的には検討されていないこと、また申請者じしんによる「宗教」の定義が明示されていないため、本研究が現代日本における宗教の現状や意味を問う研究へと発展する道筋が見えにくいことなど、残された課題も少なくない。

とはいえ、本研究が従来の葬送儀礼研究の弱点や一面性を大きく補正するものであることはまちがいない、よって、これを博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。